

新・農業経営者ルポ／第127回

**上野満という  
希有の農業指導者の子、  
孫として受け継ぐ  
誇りと夢と葛藤**



# 上野満という希有の農業指導者の子、孫として受け継ぐ誇りと夢と葛藤

農民は貧しく、日本人が飢えに怯えていた時代に上野満という農村リーダーがいた。満は、満州開拓団の団長を経て徴兵、敗戦を迎え、その後シベリアに留される。終戦2年後の1947年に帰国すると故郷の福岡には戻らず、現在の茨城県稲敷市市崎に15戸の農家による協同農場、新平須協同農場を組織する。満州開拓団時代の満を尊敬し、その協同農業の理論に心酔する若者たちが集まって協同農場の発足だった。70年代後半に協同農場は崩壊したが、満の人間としての理想と誇りは長男の達(75歳)、孫の裕(46歳)に受け継がれている。

文／昆吉則、写真／瀧島敦志

上野裕は、農事組合法人新利根協同農学塾農場の代表理事を務める。新利根協同農学塾農場はその名の通り、新平須協同農場を組織したとき、その思想を若者に伝えるための満の私塾として始まったものである。現在は裕が茨城県では珍しい放牧酪農で実質的に個人で経営している。

自作地は農学塾が所有する4.7haだが、協同農場の離農者の農地だけでもやがては30ha規模の放牧が可能になるだろう。そこで、牛に無理させるのではなく、土と草を作り、乳量は減っても面積当たりに飼える牛の数で経営を考える放牧酪農と、牧場を現代人の癒しの場となるような事業を異業種の人々との協力で作っていかないかと考えている。現在、成牛33頭、育成が10頭程度。かつては1万羽を目指すような購入飼料中心の経営を目指したが、飼料の高騰に伴って経営は危機的状況に陥り、2005年から放牧酪

裕は考えている。

## 上野満の思想

この記事を書くために上野満の著書と満の妻・ただ江の手記を読み、達の話聞いた。すると達が満に、そして達と裕の間にもさまざまな葛藤や批判があることを知った。しかし、話を聞いてみると、協同農場という組織論はともかくも達と裕の語る理想と生きる誇りとは満のそれを受け継いでいると感じる。

満は、福岡県の中農の三男として生まれ、長男は家を継ぐべく農学校を卒業したが、家出して東京の大学に進んでいた。大学に進学することはいまでは想像できないような文字通りのエリートコースだった。成績の良かった満もそれが許される立場にあったが、それを拒否して高等学校を卒業すると独学で学びながら、家の農業を手伝う道を選んだ。兄に限らず勉学に優れた農家の子どもたちが立身出世を願ってエリート道を選び、親に山を売らせてその学資を工面する姿を見て、それは農民を打ち捨てて裏切ることではないかと思っただけだ。また、第一次世界大戦の好景気に沸く当時、農村でも誰もが一銭、二銭の利を求めてなりふり構わぬ金儲けに走っていた。満はそんな農民の姿を見ることが耐え



## 新利根協同農学塾農場 代表理事

# 上野裕

茨城県稲敷市

うえの・ゆたか 1968年、茨城県稲敷市生まれ。終戦後の47年に同地に15戸の農家による協同農場（新平須協同農場）を組織した上野満の孫として生まれる。酪農学園大学卒業後、酪農に従事。2005年より茨城県では珍しい放牧酪農に経営を転換するとともに、それを現代人の癒しの場とする牧場を目指している。



1 牛舎は古いが、設備に金をかけないことが経営を安定させている。2 牛の更新に金をかけないために、ホルスタインにジャージーの種付けをし、その子どもにさらにジャージーの種を付けて血を濃くしているという。

られなかった。  
 強烈な農本主義者であると同時に農民を無知から解放し、真の農村人としての教養を高めさせることを満は人生のテーマと考えるようになった。しかし、そんな満も家の仕事と独学を続ける暮らしの後に家を捨てた。武者小路実篤が大分県日向に

すでに絶版になっているが、上野満の思想を語る主著（家の光刊）はいまでも読む価値がある。妻・ただ江の手記を残している。

作った「新しき村」に満の理想があると思っただのだ。そこは、誰もが1日6時間の労働義務を果たせばあとは自由に哲学、文学、芸術を語り合うことが許されていた。しかし、新しき村の経済的運営は構成員の労働の成果ではなく、実篤の私財で賄われていた。夢のような2年間だったが、経済的自立がなければ個人の本当の自由はないと考える満にとつては、実篤に寄生して生きる都会育ちの芸術青年たちと共に生きること嫌気が差したのだ。

その後、実篤の縁もあって埼玉県川越市の地主から小さな農地を借り、そこに自ら小屋を建てて5年間の晴耕雨読の日々を送る。そんな思索のなかから農民が農地と技能を出し合う協同農場で1日8時間、週6日労働、平等の分配という協同農場建設の組織論を作り上げる。そんな満の理論が評価され、満州の現代人

部落の指導農場長として派遣される。さらに、日本の若者による開拓義勇隊訓練本部の指導者となる。その後、徴兵、シベリア抑留を経て、新利根で新平須協同農場の建設に取り組む。同時に、各地の協同農場建設と指導に茨城県内だけではなく、全国を走り回った。

新平須農場では74年に4人一家族で出稼ぎをせずとも年収300万円が得られるまでになった。それは、協同農場の成果であるとともに、日本の経済成長の結果でもあった。農家であればこそ食費がかからず、100万円の借金で作れた構成員の住宅も返済がほとんど終わり、住居費も少ない。それで十分な暮らしが可能だと彼の著書には書いてある。しかし、その数年後に協同農場は崩壊する。15戸の入植で始まった協同農場は現在、個人経営で酪農が7戸、園芸が1戸あり、その他は在村のま

ま離農している。崩壊の理由は、世代交代と時代の変化だった。

上野満に憧れて集まった人々が構成員だった時代には彼らに強い共感関係があった。しかし、構成員が世代交代すると親たちが持っていた共感関係がなくなり、それぞれの欲も出てくる。また、カリスマ的指導者だった満が組織を「支配」できなくなり、満の思想は実現できなくなったのだろう。

さらに、満が生きてきた農民が貧しく、国民も飢えていた60年代まではともかく、70年代に入ると欠乏より過剰、空腹より満腹による病理が人々や社会を苛むようになる。そんな時代になると、満の農本主義、そして協同農場の平等主義の理念では人々を納得させられなくなった。

**上野達の実践**

満の長男である達は父親の生き方

# 上野満という希有の農業指導者の子、孫として受け継ぐ誇りと夢と葛藤



乾草のロールは仲間のコントラクターに供給してもらっている。



放牧地の改良のためにサブソイラーをかけているが、達はプラウを使うべきだという。



瀧島と小泉が持ってきたトウモロコシを食べさせてみる。

を尊敬し、影響を受けつつも批判する。満は、その著書の中で農業の外にいる者が農業を支配することを何度も手厳しく批判しているが、達が物心ついたところに満は家にも農場にもほとんどおらず、県内に限らず全国を飛び回り、農水省や県行政、農業団体の役職を果たしていた。それは新時代の農村リーダーを目指した満にとって本望だったかもしれないが、農作業や農場経営の現場にいない父のあり様に達は反発していた。「親父は評論家。農業協同経営教の教祖で思想家かもしれないが、農家ではなかった」

満は達にも自分と同じような農村指導者になることを望んでいたのだろうと達は言うが、達は酪農学園大学に進むと各地の酪農家を訪ね歩き、あるときは居ついて酪農経営を学んだ。現場の実践家としての自らの人生を選んだ。60年に大学を卒業して家に戻った。最初の1年間は協同農場で働いたが、翌年になると満に農学塾農場の仕事をしてくれないかと頼まれた。日本の社会が戦後の貧しさから少しずつ解放されていくと、農学塾に集まる若者も変化し始めている。人の出入りが激しく、農学塾農場の経営が苦しくなっていたのだ。達は喜んでそれを受け入れた。当時、農学塾農場にいた2人の仲間

とともに、農場経営に精を出し、すぐそばの自宅には戻らず、塾の仲間と共同生活をして満を避けていた。強烈な個性を持つ父親から自由になりたかったのだろう。稲作と養豚と酪農の農学塾農場で達は酪農を担当した。

そう話す達だが、大学の恩師に練り返し聞かされていたという「農民の不幸とは無知であり、農業教育とは農民の無知からの解放である」という言葉。そして当時、福澤諭吉の本で読んだ、国の独立とは一人ひとりの個人の独立がなければ真の独立ではなく、人間の独立は思想だけでなく経済的独立が必要である、という考え方に影響を受けていた。農学塾農場の経営で父親から経済的に独立しようと考えたのだ。

酪農学園時代と農学塾農場での経験がその後の達の人生を決定づけた。しかし、満を避けながらも恩師と福澤の言葉とは満が考え続けたことそのものだったのではないだろうか。

て年間7000ℓ、8産、5万ℓを達成するようになった。それは適正な糞尿の還元とプラウでの天地返し、デントコーンや牧草の輪作などによって土壌改良を進めた結果だったという。さらに、良質な素牛を導入することはできなくとも毎年、種付けで牛を改良し、市場に出すまでもなく、達が生ませた子牛を人が牧場を訪ねて買ってくれるような牛の改良も進んだ。

しかし、そんな達に農業、そして酪農に対する気持ちを冷めさせることが起きた。85年のプラザ合意による円高の進行だ。達が取り組んできた土と自給飼料、牛の改良による酪農経営の安定という考え方より、円高で安くなった輸入飼料で牛乳を搾るといふ施設型の酪農が持てはやされ、そのほうが簡単に利益を出せる時代になったことだ。それは達の考える酪農の理想とはあまりにもかけ離れたものだった。

それでも達は、いまでいう6次産業化かもしれないが、アイスクリームの製造を始めた。何かの補助金をもらってやったことではない。バブル時代の最後の時期に市中銀行から借金をして始めたことだった。2年後にはバブルが弾け、高い金利の借金が残ったが、達のアイスクリームをと言ってくれる業者もおり、いま



茨城ではあるが、草地基盤は30ha以上に拡大できる。放牧地の端にある榎の大木は良い景観を演出する。



茨城でありながら平らで放牧に最適な1カ所に農地がまとまっている。

でも続けている。すでに酪農の経営にはタッチしていないが、現在でも年間100万円くらいの売り上げにはなるそうだ。達は政府の補助金に一切頼らず、独立自尊で経営してきたことを誇りとしている。そして、いまになって考えたと反発した満の影響を受け、満が作った人脈に助けられてきたと別れ際に話していた。

### 上野裕のチャレンジ

裕と筆者の出会い、昨年11月の千葉県成田市での子実トウモロコシ検討会だった。裕は検討会に参加し、成田の検討会でトウモロコシ生産の実践者として参加していた瀧島敦志と小泉輝夫も裕と出会い、協力の可能性を語り合っていた。そんなこと

から筆者が裕を訪ねると聞きつけ、瀧島、小泉の2人も同行することになった。

瀧島、小泉も筆者は親の世代からの付き合いである。その3人の話は、親たちへの尊敬を語りつつも自分の違い、農業経営者としての個性の違いについてだった。彼らの親世代でも多くの農家の関心は政府がばらまく交付金や補助金の額だけ。しかも、自ら経営の可能性を切り開こうという意思を持った農家は限られていた。彼らの親たちは新しい農業経営に取り組み、それゆえに他の農家や地域からは特別視されるような存在だった。瀧島の父・秀樹は時代に合った経営センスを発揮していたが、技術を追求するタイプ。小泉の父・孝義もさまざまな取り組みをした後、いまは後継者の輝夫を後ろで支援する温厚な父親を演じている。

裕も瀧島も小泉も明らかにその親たちとは違う時代を生きている。先に書いた欠乏の社会から過剰の社会への転換は戦後を生きてきた彼らの親世代も理解している。でも、3人の中でも一番年上の裕でもすでに過剰の病理が始まってから生まれ、農家であるか否かにかかわらずそれを受け入れ、時にはそれを享受しながら育ってきた。でも、この3人は時代の変化の中で落ちこぼれようとす

## 上野満という希有の農業指導者の子、孫として受け継ぐ誇りと夢と葛藤



無選別の乾燥トウモロコシを裕の粉碎機で碎いてみた。裕はまったく問題ないという。

る農家を農業政策が守ろうとするのを、その過剰な保護が農家や農業を助けるのではなく、むしろ農家を弱体化させ自らの誇りを奪うことにつながるのに気づいている。やがて現在のような保護農政がなくなる時代に向けて体質強化を進めるだけでなく、これからの時代に人々が農業に求めるものが何であるかに気づいている。そうした条件の中で生き延びていくための経営のあり方を考えている。裕がトウモロコシの検討会に参加し、瀧島や小泉との交流を求めたのもそのためだ。裕が目指す放牧酪農であればこそ量は限定的であっても近隣に国産トウモロコシを供給

してくれる仲間が得られることに注目したのだ。そして、それに取り組む若い耕種農家との出会いがうれしかった。

達は、裕の酪農経営を危ういものだと見ている。一度は施設型酪農を志したものの放牧酪農を目指し、経営が改善されてはきている。でも、達から見ればその土づくりへのこだわりが薄いという。しかし、土壌改良やそのための機械化に関して強いこだわりを持つ瀧島や小泉との出会いを求める裕の変化にも注目しているようだ。達は農業には絶望しているとまで言うが、とりわけ裕が水田転作に伴う交付金に依存した経営になることを危ういと思っている。さらに、放牧酪農での6次産業化を考える裕の考えが理解できないようだ。でも、達は同時に言う。

「人は一人一代。家は三代にわたってまともな農家じゃないんだ」

それは裕自身が判断することであり、達自身が満に反発して生きてきたことと同じ己の責任で道を選ぶしかないのだと考えているようだ。

しかし、満、達、裕がそうであるように瀧島、小泉もまた、時代の中で生きる誇りと農業者であればこそ思想を持っていると思う。満、そして達が思った農民の無知からの解放というテーマは裕たちにとって当



協同農場ではないが、異質の農業経営者たちが利害を調整しながら描く未来に新時代の農業の可能性がある。左から裕、瀧島、小泉

てはまらない。経済的にも文化的にも豊かな国になり、現在のレベルではないとしても、農業に対する一定の支援策は今後も続くなかで彼らは経営を成り立たせていくだろう。

70年代に始まる欠乏から過剰への日本社会の転換の中での農業のあり様を話題にしてきた筆者の目からすれば、裕たちに可能性を感じる。彼

らは時代の変化を親世代とは異なった視点で見抜く力を持っている。

裕は農業の役割をカロリーや栄養の供給という農業のいわば動脈的側面とともに過剰の病理社会に生きる現代の人々の葛藤を受け止め、癒す静脈産業としての農業の可能性、それに自分が果たせる役割を考えているのだ。

(文中敬称略)